



一兎、二兎を追うのも情熱次第

校長 田邊 雅也

二兎を追う者は一兎をも得ず

令和5年は卯年です。「二兎を追う者は一兎をも得ず（二羽の野ウサギを追いかけると、どちらも捕らえられない。If you run after two hares, you will catch neither.）」という西洋の格言を耳にします。同時に違った二つのことをしようとすれば、結局どちらも成功しないというたとえです。欲張って両方追い求めても、中途半端になり、結局、どちらも得ることができない、という意味です。まずひとつの結果を出してから次に向かったり、地に足をつけじっくり取り組んだりすることが大切だ、と教えてくれています。謙虚さを教える格言として、日本人にも受け入れられたのだと思います。

二兎を追うものだけが二兎を得る

一方で、学校ではいろんな教科を学びます。例えば、文武両道と昔から言いますが、勉強か運動か、どちらかだけをやっているではありません。心の教育も含め、知徳体のバランスのとれた教育が求められています。社会人なら、プロジェクトをいくつも抱えて、マルチタスクで成果を出している方もいらっしゃるかもしれません。また、仕事はもちろん、育児も趣味にも全力で向き合っている方もいらっしゃると思います。実際は、切替えの問題なのかもしれませんが、「二兎を追うものだけが二兎を得る」という言葉を肯定的に捉える方も多いのではないのでしょうか。

情熱に勝る能力なし

今年の箱根駅伝で、駒澤大学を総合優勝に導き、3月にご勇退される 大八木 弘明 監督の好きな言葉、「情熱に勝る能力なし」がテレビで紹介されました。物事を成し遂げる原動力には、心の底から湧き上がってくる情熱に勝るものはない、という意味です。情熱は、大なり小なり、子供も大人も経験していて、強い力があることを知っています。一兎でも二兎でも、何兎であっても、情熱があれば、追い求めることができます。得るものがあれば、次々に情熱が生まれます。大八木監督には、学生たちを強く立派に育てたい、という強い情熱を感じます。何年もかけ、指導方法をアップデートさせながら、駒大名物にもなった熱い言葉を飛ばし続け、困難を乗り越えてきました。そして今年、駅伝三冠（出雲・全日本・箱根）という、三兎をも得ました。日本中に感動を与えてくれる箱根駅伝でした。そして今、大八木監督の情熱は、世界に向いています。

二兎も三兎も四兎も追って深い学びに

挑戦すればするだけ、自分が思っている以上に、キャパシティーは広がっていきます。多くのことを同時に行える能力があるのに、使わないのはもったいないのではないのでしょうか。複数のことを曲芸のように同時にこなすのは、難しいかもしれませんが、ひとつの出口が見えかけたら、すぐ次に取りかかってみると、意外とできると感じます。二兎どころか、三兎も四兎も得るために「次、その次」と、先を意識し続けることが大切なのでしょう。学びの上では、獲得した知識や技能がつながることで視野も広がります。次の課題に向き合いながら、新しい世界も見えてきます。これこそ、深い学びであり、探究のサイクルです。「成し遂げよう。」という情熱が根本にあるかどうか重要です。

情熱を燃やし、計り知れない可能性を広げる

「二兎を追う者は一兎をも得ず」も、対極の「二足の草鞋を履く」も、情熱次第で成し遂げられる、ということではないのでしょうか。教育活動で考えると、子供の情熱に、大人が火をつけることで、課題や問題、困難を乗り越え、自分から何かを創り出そうという強い意欲が生まれるのだと思います。やらされる学びに対しては、大きな情熱も意欲も生まれません。目指す学校像である「自律と探究」の根幹には、子供にも大人にも、情熱という強い力が必要だということを今、感じています。心に火をつけ、燃やし続け、燃え方にも個性があるかもしれませんが、子供たちの計り知れない可能性を広げられるような教育活動を目指してまいります。今年もご支援、ご協力をよろしくお願い致します。